

## 聖書を読みなさい！

クリスチャンの基本的な権利と責任

<https://ichthys.com/readbible.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士 著

このサイト「Ichthys」は、詳細な聖書研究を通して、クリスチャンの霊的成長に献身する働きです。そして、このサイトのような体系的な聖書研究に取り組む際、その不可欠な前提として受け入れられるべき非常に重要な原則があります。それは、クリスチャンは毎日欠かさず、自分自身で**聖書を読む**べきだということです。

### ベレヤ人の模範：

さて、[ベレヤの人々]は、テサロニケの人々よりも高潔であり、非常な熱心さをもって御言葉を受け入れつつ、自分たちが教えられていることが本当にそうであるかどうかを確かめるため、聖書を調べていた。[\(使徒行伝 17 章 11 節\)](#)

この初代の信者たちは、使徒パウロから教えられたことを「本当に正しいのか確かめた」ことで非難されるどころか、この節は実際には彼らを称賛しています。そしてギリシヤ語本文を見るなら、ベレヤ人たちが主として福音を熱心に受け入れた点で称賛されていることは明らかですが、それでもなお、この節は彼らを「信頼が足りない」と責めるどころか、その行動自体を評価しているのです。この節は、教えられていることの真実性を確かめるために、時間と関心を払って**聖書を調べる**という実践を、明白に是認しています。なぜなら、

**☑もし教えられていることが本当に真理であるなら、聖書はそれを明確に裏づけるはずだからです。**

正確な聖書教育を活用することが、信者の霊的成長において重要な部分であるのは確かです。実際、それこそがこの働き全体の目的です。さらに、聖書教育を備えることは、聖霊なる神の疑いようのない務めです([エペソ 4 章 11-16 節](#))。しかし同時に、教えられていることを聖書と照らし合わせる責任は、聞く側にもあります。もちろん、それはへりくだった態度でなされるべきです(ベレヤ人たちが示したように)。しかし、それでもなお、そうしなければなりません。聖書を教える者は誰であれ、そのような吟味を問題視すべきではありません。なぜなら、そのような手順こそが、皆を誠実に保たせる唯一の方法だからです。イエス・キリストを信じる者として、私たちは最終的には、人の言

葉ではなく、神と神の御言葉——すなわち、生ける御言葉であるイエスと、書かれた御言葉である聖書——に信頼を置かなければなりません：

理想的には、あなたの教師が教えることと、あなたがその原則や教理を裏づけるために示された聖句を確認しつつ聖書を読む中で理解することとの間に、矛盾は存在しないはずです。また、教えられていることと自分が聖書から読み取ることとの間に、何らかの食い違いがあるように感じる場合でも、それには悪意とは無関係な理由が数多くあり得ることも事実です。そして、だれも、小さな相違だけを理由に関係を断つべきだと主張しているわけではありません。

しかし同時に、毎日聖書を読み続ける中で、「警告のベル」があまりにも頻繁に、またあまりにも大きく鳴り始めるなら、あなたの霊的安全のためには、それを無視しないことが重要です。使徒パウロは、この警告を自分自身にまで適用しています。そして、彼ほど輝かしい実績を持つ者であっても、すべての聖書教育に対して、聖書による吟味を継続的に適用する必要から免除されるわけではない、という原則を示しています。

しかし、たとえこの私であっても、あるいは天からの御使いであっても、私があなたがたに宣べ伝えた福音と異なるものを宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです！（[ガラテヤ 1 章 8-9 節](#)）

信者には、（たとえそれが善意を持ち、尊敬されている人々であっても）人々の言葉よりも、聖書が語ることを優先する責任があります。しかし、この原則は、日頃から聖書を読んでいなければ実行不可能です。私たち信者は、「すべてを吟味しなさい」（[第一テサロニケ 5 章 21 節](#)）、「霊を試し、それが神から出たものかどうか見分けなさい」（[第一ヨハネ 4 章 1 節](#)）、「教えや預言を吟味しなさい」（[第一コリント 14 章 29 節](#)）と命じられています。しかし、事前の知識なしに、どうしてそれができるでしょうか。これらの命令を果たすことは、聖書そのものについての深く確かな土台なしには不可能です。

**☑ 聖書こそ、私たちが真理を吟味するための試金石なのです。**

そして、考慮されるべきなのは、単に関連箇所だけではありません。私たちは、聖書全体、その縦糸と横糸の全体像について、広い理解と感覚を持つ必要があります。有名な「盲人と象」のたとえのように、もし私たちが聖書に実際に記されていること全体について限られた見方しか持っていないなら、私たちの判断は必ず歪められてしまいます。すべての聖なる聖書を、規律をもって定期的に読むこと、そして教理的に正確な教えとを組み合わせることによってこそ、偽りの教えから最大限の防御が得られるので

す。

キリストご自身が、ある者を使徒、ある者を預言者、ある者を伝道者、ある者を牧師また教師として任命されたのは、聖徒たちを奉仕の働きのために整え、キリストの体全体を建て上げるためでした。それは、私たちすべてが、正しい信仰と神の御子への完全な献身において一つとなり、それぞれが成熟した者となるためです。すなわち、キリストによって定義される成熟の基準に到達するためです。こうして私たちは、もはや未熟な者として、人々の悪巧みや欺きの策略から出る、あらゆる種類のいわゆる教えの風に吹き回され、翻弄されることがなくなります。むしろ、愛をもって**真理を受け入れる**ことにより、教会のかしらであるキリストを模範として、あらゆる面で成長していくのです。このようにして教会全体は、キリストによって適切に組み合わされ、結び合わされ、キリストが力強く供給される節々を通して、それぞれの部分が働きを果たしつつ、愛のうちに自らを建て上げながら成長していくのです。[\(エペソ 4 章 11-16 節\)](#)

**キリストによる吟味：**もし聖書以外に真理の源がないのなら、私たちはどこから真理を得るのでしょうか。もし聖書によらないなら、どのようにしてイエス・キリストへ導かれることを期待できるのでしょうか。エペソ人への手紙から先ほど引用した箇所で、使徒パウロが明らかにしているように、「真理を受け入れる」ことの目的は二つあります。すなわち、1) 偽りの教えに惑わされないため、そして、2) 私たちの主イエス・キリストとの関係をより強いものにするためです。簡潔に言えば、偽りの教えはキリストから離れさせ、正しい教えはキリストへ近づけます。ですから、問題となっている教えが正しいか偽りかを、信者が見分ける基本的な方法はここにあります。すべての教えは、「キリストによる吟味」を通過しなければなりません。

すべて、イエス・キリストが肉体をもって来られたことを告白する霊[すなわち、人、教え、組織]は神から出たものである。しかし、イエス・キリストが肉体をもって来られたことを告白しない霊は、神から出たものではない。[\(第一ヨハネ 4 章 2 節\)](#)

つまり、すべての正しい教えは、この命題から始まらなければならないのです。そして、この命題には次のような帰結が含まれており、またそれに基づいています。偽りの教えは、必ずこれらの一部または全部を否定します。

・イエス・キリストは、完全な神性と真の人性の両方を持っておられること。[\(ローマ 9](#)

[章 5 節](#); [コロサイ 2 章 9 節](#); [第一ヨハネ 5 章 6-12 節](#))

・キリストは、全人類のために死ぬために世に来られたこと。(ヨハネ 3 章 16 節; [第一ペテロ 2 章 24 節](#))

・キリストのみわざは、父なる神に受け入れられたこと。(ローマ 3 章 21-26 節)

・私たちは、キリストとのみわざに対する信仰によってのみ救われるのであり(自分自身の行いによるのではないこと)。(エペソ 2 章 8-9 節)

・イエス・キリストへの信仰を離れては、父なる神へ近づく道は存在しないこと。(ヨハネ 14 章 6 節)

・真のイエス・キリスト信者は、この地上での生涯を通して、キリストとその教えに従うこと。(マタイ 7 章 20 節; [第一ヨハネ 2 章 4 節](#))

この最後の点によって、私たちは再び、「毎日聖書を読む」という問題へ戻ってきます。もし私たちがキリストとその教えに従おうとするなら、キリストについて、またその教えについて学ばなければなりません。ですから、真理における私たちの訓練、あるいは「弟子訓練」は、二つの源から来なければなりません。すなわち、1) 自分自身で聖書を読むこと、そして、2) 正当で備えられた聖書教師の権威を受け入れることです。しかし、この第二の源——すなわち、キリストとその教えについて学ぶための教師——に関してさえ、すべての正しい教えは、最終的かつ根本的には**聖書から**導き出されるものです。では、もし私たち自身が、真理の源そのものである聖書へ日々向かう習慣を持たないなら、信者として、教えられていることが正しいかどうかを、どのように吟味できるのでしょうか。

さらに、教師であれ一般信徒であれ、「自分は聖書ではなくキリストに従っている」と言う者がいてはなりません。そのようなことは不可能であり、したがって、そのような発言は危険な偽りです。どうしてそうであり得るのでしょうか。イエス・キリストが、神の完全で輝かしい真理の生ける反映であるように、聖なる聖書もまた、イエス・キリストの人格と思いを具体的に表したものであり、私たち聖徒に与えられたものだからです。それは、私たちがその真理を学び、知るためなのです。

・ 聖書は神の御言葉:

神の御言葉は生きていて力があり、どんな両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄とを切り分けるまでに刺し通し、心の思いやはかりごとを見分ける。  
([ヘブル 4 章 12 節](#))

- 聖書、すなわち神の御言葉は、神によって靈感を与えられた:

聖書はすべて神の靈感を受けたものであり、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益である。( [第二テモテ 3 章 16 節](#) )

- 書かれた神の御言葉は、神の真理を現し、神の権威を持つ:

あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べている。しかし、その聖書こそ、わたしについて証しをするものである。( [ヨハネ 5 章 39 節](#) )

- イエス・キリストは、真理であり、生ける神の御言葉:

「わたしは道であり、真理であり、命である。」( [ヨハネ 14 章 6 節](#) )

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じつと見つめ、自分の手で触れたもの——これは、いのちの御言葉[すなわちイエス・キリスト]についてである。( [第一ヨハネ 1 章 1 節](#) )

- 書かれた御言葉は、生ける御言葉であるイエス・キリストを現す(聖霊を通して):

だれが主の心を知っていて、主を教えることができようか。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている。[すなわち、聖霊が、キリストご自身の思いである聖書を照らしてくださるのである]。( [第一コリント 2 章 16 節](#); [第一コリント 2 章 12-13 節](#) 参照)

- したがって、聖書だけが、キリストについての確かな証言なのです:

わたしたちは、巧みに作り上げられた作り話に従って、わたしたちの主イエス・キリストの力と再臨をあなたがたに知らせたのではない。むしろ、わたしたちはその威光を自分の目で見た者たちである。キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになった時、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』という声が、荘厳な栄光の中からキリストに向かって発せられた。

わたしたち自身、その声が天から発せられるのを聞いたのである。わたしたちはキリストと共に聖なる山にいたからである[[マタイ 17 章 1-8 節](#)参照]。しかしわたしは、預言によって与えられた御言葉[すなわち聖書]を、それ以上に確かなものと考えている[すなわち、自分の目を見たこと以上に]。あなたがたも、この預言の御言葉に細心の注意を払うのがよい。それは、暗い所を照らすともしびのようなものであり[[詩篇 119 篇 105 節](#)参照]、やがて夜が明け、明けの明星[すなわちキリスト]が昇るその日まで続く。まず第一に知っておかなければならないことは、預言の聖書は、どれ一つとして人間の個人的な考えから生じたものではないということである。なぜなら、真の預言は決して人間の意志によって出たのではなく、聖霊に導かれた神の聖なる人々が語ったものだからである。(第二ペテロ 1 章 16-21 節)

**聖書そのもの**——人間や組織の著作や教えではなく、第三者によるとされる目撃証言でもなく、また幻、夢、預言、その他いかなる情報源でもなく——こそが、**イエス・キリストに従う者であると自ら称する人々にとって、信仰と実践の唯一正しい基準なのです。**

### 聖書を読まないための言い訳チェックリスト:

あなたはたぶん電話を持っているでしょう。そして、おそらくほとんど毎日それで話しているでしょう。

しかし、あなたは毎日聖書を読んでいますか？

あなたはたぶんラジオを持っているでしょう。そして、おそらくほとんど毎日それを聞いているでしょう。

しかし、あなたは毎日聖書を読んでいますか？

あなたはたぶんテレビを持っているでしょう。そして、おそらくほとんど毎日それを見ているでしょう。

しかし、あなたは毎日聖書を読んでいますか？

あなたはたぶん新聞を取っているでしょう。そして、おそらくほとんど毎日それを読んでいるでしょう。

しかし、あなたは毎日聖書を読んでいますか？

私たちは、上に挙げたような現代の便利さに満ちた世界に生きています。おそらく皮肉なことに、それらは私たちの時間と注意力に大きな要求を課す一方で、過去の時代には存在しなかった機会も与えてくれています。しかし、現代世界の不利な点や、技術の明らかに否定的な側面にもかかわらず、第一世紀の信者たちには欠けていた少なくとも一つの重要な利点を、私たちは持っていることは疑いありません。すなわち、聖書が一般的に入手可能であることです。

古代世界の人々には、もしかすると多少の言い訳があったかもしれません：

- 費用：聖書全巻の写本を所有することは、普通の人が一生涯かかっても購入できないほど高価でした。これは部分的には材料費が極めて高かったためです（特に羊皮紙の場合）。信者たちは、自分のために少しでも聖句を持つようとして、お気に入りの節を土器の破片に書き記すことさえありました。
- 時間：印刷機は比較的新しい発明であり、使徒たちの働きの後の時代には、新しい聖書の写本（あるいはその一部）を作るには、一文字ずつ手で丹念に写さなければなりません。しかも、古代のペンとインクでは、手書きによる筆写は現代よりはるかに困難で、はるかに時間がかかり、事実上、専門家を必要としました。
- 正典（canon）：新約聖書の正典全体が完全に収集されるまでには時間がかかりました。そのため、豊富な資力を持つ稀な人であっても、聖書全巻をすぐに利用できたわけではありませんでした。
- 識字能力：たとえ聖書の写本を手に入れられたとしても、読み書き能力は普遍的なものではなく、当然視できるものでもありませんでした（特に、初期信者の大きな部分を占めていた奴隷や解放奴隷の間ではそうでした）。また、多少ギリシヤ語教育を受けた人であっても、読書は現代よりはるかに骨の折れる作業でした。文字は読みにくく、巻物は扱いにくかったため、読むこと自体が重労働だったのです（写本を冊子形式にした「コデックス」は後になって発明されました）。
- 翻訳：もしあなたの言語がギリシヤ語でなかったらどうでしょうか。聖書が各地へ広まり、ラテン語、シリア語、アルメニア語など当時の言語に翻訳されるまでには時間が必要でした。そして古代の翻訳写本の残存資料から分かるように、底本（写本）の正確さや翻訳そのものの正確さも、小さくない問題でした。たとえ母語がギリシヤ語であったとしても、旧約聖書については、ヘブル語およびアラム語

原文のギリシヤ語訳である「七十人訳 (Septuagint)」を用いなければならず、この訳はしばしば原典から大きく逸脱していました。

- ・ 正確性: 今日、私たちが標準的な聖書翻訳を読む時、その序文を見れば、少数の例外を除き、その翻訳が高度な資格を持つ大勢の専門家によって、極めて高い正確性を示す写本群に基づいて行われていることが分かります。しかし古代世界では、手に入るものを受け入れるしかありませんでした(そして、ある写本や翻訳には重大な問題を抱えたものもありました)。

しかし、私たちがほとんど考えもしないような障害や不利を抱えていたにもかかわらず、これら初期のクリスチャンたちは聖書に対して極めて強い渴きを持っていました。彼らの御言葉への渴望は非常に大きかったため、ローマ帝国による組織的迫害や聖書写本の破壊にもかかわらず、古代から数多くの写本、パピルス、その他の本文証拠が生き残っているのです。実際、聖書は古代世界から伝わった文書の中で、群を抜いて最も良好に保存され、最も豊富な証拠資料によって裏づけられている文書です。そのような模範を前にして、私たちにはどんな言い訳があるのでしょうか。

- ・「でも、それなら教会で聞いています。」

初期のクリスチャンたちが、自分専用の聖書写本を持てなかったことを補う方法の一つは、教会の礼拝の中で聖書を広範囲に朗読することでした。「朗読に専念しなさい」と、パウロは若い弟子テモテに命じています([第一テモテ 4章 13節](#))。また、初期の教会では、一年のうちに聖書全体を読み通すことも珍しくありませんでした。今日これが普通に行われていないのは、まさに私たちが各自で聖書を持っているからです。

- ・「でも、もう読んだことがあります。」

世界には、聖書を一冊所有することさえできないほど貧しい人々があります。もしあなたの本棚に聖書がなかったなら、おそらくあなたはすぐに、神の御言葉がどれほど尊いものかを悟るでしょう。そして、もう一度、さらにもう一度それを読むことができるなら、どれほどのことでも差し出そうと思うはずですよ。

- ・「時々、理解するのが難しいです。」

今日でも世界には、読み書きができず、自分で聖書を読むことがまったくできない人々があります。また、政治的事情のために、聖書を説明してくれる教えや資料への接

近が困難な人々もいます(例えば中国の信者たち)。私たちは、無数の聖書教育の機会と、聖書に関する書物への無制限のアクセスを持っているのですから、この点における祝福を認識すべきです。そして神を信頼し、理解へと導いてくださるよう祈るべきです(そして、その理解へと導く正当な働きにも従事すべきです)。

・「忙しすぎて読む時間がありません。」

世界には、キリスト教信仰のために迫害され、自分の望むように聖書を学ぶことが妨げられている人々があります(例えばスーダンの信者たち)。私たちは比較的恵まれた立場にあるのですから、神と、その私たちへの愛について学ぶための時間を作るべきです。もし聖書を読むために時間を取る習慣を持たないなら、どのようにして主の「目を覚ましていなさい」という命令に従っていることになるのでしょうか([マタイ 25 章 13 節](#))。聖書に私たちの思いを近づけ続けていなければ、偽りの教理や惑わしの危険に対して無防備になる恐れがあります。

### 聖書の無知 = カルトへの温床:

時代の終わりには、キリスト教信仰からの大規模な離反が起こります(大背教:[マタイ 24 章 12 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3 節](#))。そしてその時、多くのクリスチャンたちが、偽りの、非聖書的教えに取り込まれてしまいます([第一テモテ 4 章 1 節以下](#); [第二テモテ 3 章 1 節以下](#); [第二ペテロ 2 章 1 節以下](#))。しかし、信者たちが聖書と、その中に含まれている真理の原則について確固たる理解を持つことが重要なのは、その未定の将来時点においてだけではありません。

聖書が実際には何を語っているのかについての無知は、多くのクリスチャンたちを、常に危険であり、しかもますます増え続けているカルト集団の教えや策略に対して、無防備にしてしまう大きな要因となってきました。勢力を広げているカルト集団は常に「マインド・コントロール」の技術に非常に長けています。そして私たちの大半は、自分はそのようなものに影響されないと考えていますが、私たちの最も根本的な恐れ、罪悪感、必要につけ込む執拗な集団圧力が、極めて効果的であり得ることを示す事例は十分に存在しています。そのような圧力は、最も自信に満ちた人でさえ、自らの意志を明け渡させることができます。クリスチャンとして、私たちが最も警戒すべきなのは、自らを「クリスチャン」と称する集団です([マタイ 7 章 15 節](#)の「羊の皮を着た狼」)。この種のカルト指導者たちは、実際には悪魔の手先であるにもかかわらず、「光の御使い」であるかのように見せかけることに非常に巧みです([第二コリント 11 章 14 節](#))。このような人物や組織に対する私たちの第一の防衛線は、聖書でなければなりません。なぜなら、彼らはまさに聖書を用いて私たちを取り込もうとするからです。ですから、次のような人

物や集団には注意しなければなりません：

- ・自分自身で聖書を読むことの重要性を軽視する。
- ・あなたの聖書読書を監督したり支配したりしようとする。
- ・彼らの「特別な翻訳版」だけを読むよう勧める(他の翻訳は「間違っている」と言う)。
- ・聖書を自分で読んでではないと教える。

### カルトの特徴：

カルトの側から見れば、聖書はあなたの手にある危険な武器です。なぜなら、少しでも心を開いて読めば、やがて彼らの教義と矛盾するようになるからです。カルト集団には、必ずいくつかの共通した特徴があります。そして、聖書にしっかりと根ざしているなら、そのような特徴は毎回、聖書によって誤りであると見抜かれるものです。しかし、聖書理解が不十分な人々に対しては、カルトの教義や手法はしばしば効果を発揮します。カルトは、初めはしばしば聖書やキリスト教を掲げますが、実際には反聖書的であり、反キリスト教的です。その起源は様々であっても、カルトは本質的特徴においてほとんど同一です。というのも、それらはすべて根本的にはサタンの計画を推し進めることに献身しているからです。これら四つの基本的なカルトの特徴を検討する時、私たちは悪魔の最初の反聖書的戦略との類似性を思い起こさせられます。カルトはほとんど常に次のことを主張します：

### 1. 分離された社会 (A Separate Society)：

「園のどの木からも取って食べてはならない、と神はほんとうに言われたのですか。」([創世記 3 章 1 節](#))

創世記第 3 章では、エバが園の中で、奇妙なことに蛇と会話している場面が描かれています。話す生き物などという異様さは、本来なら彼女に警戒心を抱かせるべきでした。しかし、その判断ミスを私たちはそれほど不思議に思うべきではありません。神とその御言葉に注意を払わなくなると、私たちは皆、偽りに対して無防備になるからです。偽りの源がどれほど奇妙であっても(今日では奇異な行動様式を持つカルト信者たちがその最も一般的な例です)、道をふさぐ真理の防壁が存在しないなら、悪魔は容易にそれを乗り越えてしまいます。上の箇所注目すると、蛇はまず、真理をねじ曲げることによって攻撃を始めています(実際には、神が禁じられたのは「知識の木」の実を食べることだけでした)。真理を歪めることは、カルトの勧誘者たちにとって重要な第一歩です。なぜなら、人々に真理の歪曲を受け入れさせることは、彼らを自分の知っている現実から引き離し始める良い方法だからです。その結果、人々は新しい指導

者と、新たに導き入れられる新しい社会に対してますます依存するようになります。その「分離された社会」は、最終的には彼らを過去の正常な生活から疎外し、ついには新しい主人たちに完全に依存させるに至ります。カルト被害者が属することになるこの新しい「分離された」共同体は、現実世界からの孤立によって成り立っています。それは単に、真理と現実の光が、その基盤である偽りを暴露してしまうからだけではありません：**カルトは、その構成員を通常社会から切り離し孤立させることによって、その最大の力を得ているのです。**

いったん聖書の真理による防壁が崩されると、被害者や新しい勧誘対象を、友人、家族、支援体系、そして一般的な正常社会から孤立させることが、カルト戦略の中心的部分となります。新しい勧誘対象の孤立は、次のような方法によって達成されます：

- ・ **不寛容な独善主義 (Intolerant Dogmatism)**: 自分たちだけが真理を独占していると主張し、自分たちの教義から少しでも外れることや、その教えについて議論することを一切認めようとしない集団には注意しなければなりません。自分たちの語ることが真理であると絶対的な確信を持っている人々には、確かに人を惹きつける力があります。しかし、その確信や独断的態度があるからといって、彼らの語ることが真実であるとは限りません。カルトはしばしば、勧誘対象者に対して次のように語ります。「真理を持っているのは自分たち『だけ』であり、その真理は他では決して見つからない。これはあなたにとって『最後の救いの機会』であり、これを逃せば地獄行きだ」と。これは、あまりにも頻繁に効果を発揮してしまう、一種の強引な押し売りの手法です。しかし、カルト内部には、本当の意味での真理探求は存在しません。なぜなら、彼らはすでに「真理を見つけた」と思い込んでいるからです。しかも不思議なことに、その「真理」はすぐには知ることができず、吟味したり検証したりすることも許されません（「いずれ後になれば、すべて明らかにされる」と言われるのです）。そして、もしその教義に疑問を呈したり異議を唱えたりしようものなら、あなたはたちまち敵と見なされます。このようなやり口は、人を孤立させます。なぜなら、新しく加わった者に、「集団とうまくやっていくためには従わなければならない」と感じさせるからです。そして、そう時間がたたないうちに、その人は自分自身の意志を明け渡してしまうのです。

- ・ **奇異な習慣 (Odd Customs)**: 普通とは異なる服装をし、奇妙な行動を示し、独特で不自然な言葉遣いや話し方（たとえば唱和など）をする集団には注意しなければなりません。そのような特徴は、ある人々にとっては異国的で奇妙な魅力を感じさせるものとなりますが、カルトの戦略においては、さらに別の重要な役割も果たしています。すなわち、その人を、同じような服装も行動も話し方もしない一般社会から切り

離し、孤立させることです。新しく加わった者が、そのカルトの習慣や振る舞いを身につけ始めると、周囲の人々は彼を避けるようになります(少なくとも距離を置くようになります)。すると、その人と同じように服装をし、行動し、話す他のメンバーたちだけが、自分と「同じ側の人間」であり、自分を完全に受け入れてくれる存在になっていきます。そして、孤立化の過程はさらに進んでいくのです。

・感情偏重 (*Emotional Excess*): 事実よりも感情を重視するような集団には注意しなければなりません。カルトは、人の孤独感、罪悪感、劣等感、さらには真理を求める誠実な願いや自己向上への思いさえも利用し、勧誘対象者を本来の生活環境から引き離すための「てこ」として巧みに用います。感情的な動揺を経験したからといって、その感情を引き起こした人々が、それゆえに誠実であり、正しく、真理を持っているということにはなりません。それは単に、彼らが感情操作に長けているということを意味しているにすぎません。同じように、感情を熱狂的あるいは過度な形で表現することも、その人が真理や「正しい道」を見いだしたことの証明にはなりません。このような感情的陶酔の表現は、多くの人にとって魅力的であり、「自分たちは真理を見つけたのだ」という感覚を強める傾向があります。しかし、それにはさらに別の効果もあります。すなわち、そのような行動を、友人や知人、時には家族でさえも「奇異なもの」と感じて距離を置くようになるため、その人を一般社会から孤立させる方向へ働くのです。

・物理的隔離 (*Physical Separation*): 自分の財産を処分し、別の州へ移住するよう求める集団には注意しなければなりません。これは、一見すると笑ってしまうほど明白なことのように思えるかもしれませんが。しかし実際には、驚くほど多くの人々が、まさにそのような悲劇的行動にまで至るほど、カルトの手法に取り込まれてしまっているのです。もちろん、これは通常、カルトによる教え込みの最初の段階ではありません。しかし、多くの哀れな人々が、私たち自身も本人たちも想像しなかったほど急速に、その段階へ導かれてしまいます。真理の岩の上にしっかり立っていないとき、また、聖書が語ることを人間の言葉より上に置かないとき、カルト指導者(あるいは指導部)とその言葉が、被害者の心の中で容易に「真理」そのものとなってしまふことは、十分あり得ることです。この過程は、多くの場合、指導者が新しい信奉者の決定(たとえどんな些細なことについてであっても)に承認を求めるよう要求することから始まります。そしてついには、その人自身による独立した判断が、ほとんど完全に失われてしまう段階へ至るのです。**ひとたび人が霊的に孤立させられてしまうなら**(すなわち、聖書の真理から切り離されてしまうなら)、その人を感情的に孤立させることはそれほど難しいことではありません。そして最終的には、かつて知っていた家族、友人、そして社会そのものから、完全に物理的に切り離されてしまうのです。

私たちが真理の錨——すなわち、神が聖書の中で私たちに語られること——を失う時、私たちは必然的に別の影響力の流れへと漂流していきます。そしてその終着点は、悪しき目的と意図を持つ「分離された共同体」において、私たちの魂の破船となる可能性さえあるのです(第一テモテ 1 章 19 節; ヘブル 2 章 1 節)。

## 2. 自己義(A Self-Righteousness):

「あなたがたは決して死ぬことはありません」と蛇は女に言った。(創世記 3 章 4 節)

カルト教理の中心的部分の一つは、罪と罪人に対する神の裁きの問題に関わっています。神の不変の義と、裁きが必ず行われるという事実は、福音に不可欠な要素です(使徒行伝 10 章 42 節, 24 章 25 節参照)。なぜなら、それによって、キリストが私たちの代わりに死ななければならなかった理由が説明されるからです(すなわち、神の御性質を満たし、なだめるためです: [ローマ 3 章 22-26 節](#))。クリスチャンである私たちは、キリストと、私たちのために成し遂げられたそのみわざに信頼することによって、自分たちの罪に対して当然下される裁きから救われます。最終的な裁き(そして地獄)が存在しないと否定することは、実質的には、神が義なる神であることを否定することです(その含意は、「神は望むなら罪を見過ごすことができる」というものになります)。またそれは、人類には救い主が必要ないことを意味することにもなります(もし罪がそれほど簡単に取り除けるならば)。神は愛なる神であり、赦しの神です。しかし、その赦しは、キリストが私たちの罪の刑罰を支払ってくださったことに基づいています。福音のこの側面を拒否することは、福音そのものを拒否することです。キリストへの信仰とは別の方法で義と永遠の命を約束するカルトは、本質的には、真に義なる神の存在を否定しています。それは、先の箇所では蛇が神を偽り者呼ばわりしたのと同じです。永遠の命(あるいは彼らがそれに相当するものとして掲げるもの)を得るために、反聖書的な集団は例外なく、何らかの自己義の体系を持ち込みます。彼らの「天国」や「樂園」は、重荷となる行いの体系(儀式、善行、自己犠牲など)によってしか到達できません。しかし、そのような行いは最終的には、御子を与え、私たちがキリストへの信仰によって真の義を得られるようにしてくださった神に対する侮辱なのです([ローマ 4 章](#))。

## 3. 秘密の教理

「あなたがそれを食べる時、あなたの目は開かれることを神は知っておられるのです。」([創世記 3 章 5 節](#)前半)

自分だけが、あるいはごく少数の人しか知らないことを知るといふ見込みに、人間が強く惹きつけられるというのは、私たちの性質に共通する特徴です。サタンによるエバへの誘惑が、なぜそれほど効果的であったのか、私たちにも理解できるでしょう。サタンはエバに対して、今日のあらゆるカルトが勧誘対象者に約束するものを提示しました。すなわち、宇宙の奥義への導き、「選ばれた悟りある少数者」だけに与えられる秘密の教理への加入です。このようなカルト的手法は、古代においては「グノーシス主義」として知られていました。それは、そのような秘密の知識を持つことこそが、霊性や霊的成長に至る道であると主張する運動でした。彼らの具体的教義の一部は今日にも伝わっており(イレナイオス『異端反駁』参照)、印刷された文章として読むと、まるで意味不明な戯言のように見えます。しかし私たちは、学問的で安全な立場から眺めるなら、現代のカルト教義もまた、明らかにばかげたものに見えるということを忘れてはなりません。ところが、カルトに引き込まれようとしている人にとっては、その「秘密の教理」が隠されたものであり、禁じられたものであるということ自体が、誘惑をさらに強めるのです。そして、それを慎重かつ選別的に少しずつ与えていく「信者たち」の、熱心で独断的な忠誠心もまた、その誘惑を強めます。そのように巧妙に作り上げられた状況の中では、カルト信者たちの断定的態度そのものが、人に強い印象を与え、服従を引き出してしまうことがあります。もちろん問題は、カルトには強い独善性はあっても、真理の権威がなく、しかも常に確かな裏づけを欠いているという点です。聖書は変わることがありません。そして、「これらのことが本当にそうなのかどうか」を、自分で読んで確かめることができます。しかしカルトの教理は、それとは正反対に、吟味にさらされることを拒み、しかもほとんどの場合、変化し続けるものです。なぜなら、それは指導者や指導部の解釈、さらには新たな「啓示」によって、いくらでも変えられてしまうからです。聖書は、神ご自身のみことばであるゆえに、聖書的キリスト教の権威なのです。ある個人や集団、その著作や「幻」が権威なのではありません。もし本当に聖書が教えられているのであれば、それは確認することができますし、検証することもできます。しかしカルト宗教は、決してその実体を明確につかむことができません。そして、その改宗者たちの「目を開く」と約束する邪悪な体系は、実際には、彼らを盲目にすることしか意図していないのです。

#### 4. 神の代用品(A Substitute for God)：

あなたがたは神のようになり、善悪を知るようになります。」([創世記 3 章 5 節](#) 後半)

ここで「神」と訳されている[創世記 3 章 5 節](#)後半のヘブル語は エロヒム Elohim

(אלהים)です。これはエル El (אל、「力ある者」「神」という語の威厳複数形です。エロヒムはヘブル語聖書において最も一般的に用いられる「神」の語であり、私たちの神の卓越性、そしてその唯一の本質の中における複数の位格(三位——父・子・聖霊)を強調しています。しかし時には、エロヒムは真の複数形として「神々」を意味することもあります(異邦諸国の神々の場合のように:[出エジプト 20 章 3 節](#))。そして、ここでのサタンの含意は、翻訳が示している以上に強い可能性があります。すなわち、「あなたがたは神々のようになる」という意味です。神のようになること、あるいは神、もしくは神的存在になることなど、あまりにも信じ難い申し出に思えるかもしれません。しかし、エバに対するこの誘惑は、サタンがこの策略を用いた最初の例ではあっても、唯一の例ではありません。実際、今日のアメリカには、この約束を極めて明確に掲げる集団がいくつも存在しています。もちろん、柔軟に操れるかどうかはまだ分からない非会員に対して、最初からそう語るわけではありません。しかし被害者が彼らの渦の中へ、ますます深く吸い込まれていくにつれて、やがてそうした教えが提示されるのです。神的地位を約束することに類似したものとして、比較的新しい形態では、「地球外文明の一部となる」という約束もあります。また時には、「進化した意識」によって人類を超越することが約束される場合もあります。しかし、「神々のようになる」ということがどのような形を取るにせよ、その野望の中には、暗黙のうちに神を置き換え、あるいは神を排除する考えが含まれています。というのは、もし人間があらゆる点で神と等しい存在になれるなら、その新しい「人間神」に対して、もはや神は神ではなくなってしまうからです。このような冒瀆的思想に対して、調子においても本文においても反対しない聖書のページを一枚でも見つけるのは難しいでしょう。そして、人が生まれながらに持っている基本的常識でさえ、このような信じ難い主張に対して抗議の声を上げます([ローマ 2 章 1-16 節](#))。しかし、この誘惑に屈したのはエバだけではありませんでした。また、「神のようになりたい」という不可能な願望を抱いた最初の被造物でもありませんでした。というのも、「神のようになりたい」、さらには最終的に神に取って代わりたいという欲望こそが、サタンの心を墮落させた高慢の罪の本質だからです([イザヤ 14 章 12-15 節](#); [エゼキエル 28 章 12-19 節](#))。したがって、この最後の点において、私たちは最初から積み上げてきた原則を見ることとなります。すなわち、カルトや反聖書的宗教とは、その最も根本的な本質において、常にサタン自身の哲学、サタン自身の宗教の具現化である、ということです。すべての偽りの宗教は、その根底において偶像崇拜であり、その偶像の背後には、私たちの礼拝を渴望する悪魔が立っているのです。結局のところ、もしあなたが唯一の真の神を礼拝していないなら、いったい誰を礼拝しているのでしょうか。キリストは、「わたしと共にいない者は、わたしに敵対する者である」と言われました([マタイ 12 章 30 節](#))。しかもこれは、人々がキリストに対して「悪霊を追い出すのに悪魔の力を使っている」と非難していた時に語られた言葉でした。またパウロは、サタンは「光の御使い」に変装すると語っています([第二コリント 11 章 14 節](#))。そして結局のこ

ろ、悪魔は自分を礼拝する者たちから、「神」以外の何と呼ばれたいのでしょうか。もし獲物となる人々に「神性の分け前」を偽って約束しなければならないとしても、それが何でしょうか。サタンは、この世のすべての王国を主に差し出すほど大胆ではありませんでしたか。しかしその約束は、彼には守ることも実現することもできないものでした ([マタイ 4 章 9 節](#))。古代の偶像宗教を調べても、同様の結果が得られます。万神殿の頂点には、ほとんど常に、古い「曲がった神」(例えばクロノス)に取って代わった、明るく輝く「天空神」(例えばユピテル)がいます。善、光、知識、兄弟愛、裁きの不存在、そして悪に対する断罪の不存在を約束することは容易です。しかし、そのような過去および現在のカルト体系の背後には、暗く不気味な現実があります。神性を分かち合い神になるどころか、そのような悪と結びつく者たちは、真の神によって断罪された被造物——すなわち悪魔——の奴隷となり、最終的には彼と同じ断罪を共有することになるだけなのです：

彼らは途方もない空論を語り、肉欲と好色によって、迷いの中に生きる者たちからかろうじて逃れた人々を誘惑する。彼らは自由を約束するが、自分自身が滅びの奴隷である。人は、自分を征服するものの奴隷となるのである。([第二ペテロ 2 章 18-19 節](#))

では、なぜ人々はカルトに従い始めるのでしょうか。しばしばそれは、自分が「真理」を逃しているという感覚を与えられるからです(組織化され、一見すると義に満ち幸福そうに見えるカルト信者たちは、その印象を作り出すことに熟達しています)。実際には、カルトが自分たちの土俵で、自分たちの戦術によって活動している時、それに抵抗するには、聖書が実際に何を語っているかについて、極めて強く確固とした理解が必要です。「羊の皮を着た狼」は、まさに現代に満ちています。彼らは最初は親切に見え、霊的ですからあるように見えるかもしれませんが。しかし、その偽りを聖書よりも信じるなら、最終的結果は霊的破滅しかありません。ちょうどダビデが、本来なら軍勢と共に出陣しているべき時に宮殿の屋上を歩き回り、バテシバを見かけた瞬間からトラブル(災い・罪への道)へ向かい始めたように([サムエル記下 11 章](#))、私たちもまた、自分が本来いるべき場所——すなわち聖書の中——にいないなら、カルトの誘惑の歌声に対して無防備になってしまいやすいのです。

## 聖書を読むこと(Reading Your Bible)：

1. *読み、そして繰り返し読むこと(Read and Re-Read)*： 重要なのは、まず実際に、自分自身で、定期的に聖書を読むようになることです。読めば読むほど、特に何度も何

度も読むほど、さまざまな良いことが起こり始めます。あなたは、その内容、主題、語り口に次第に親しむようになります。そして、この複雑で驚くべき「書物の中の書物」の至る所に散りばめられている思想や教えの間に、ますます多くのつながりを見いだすようになります。また、聖書についての知識の枠組みを築いていく中で、多くの疑問への答えも与えられていきます。その知識は、あなたが受ける正確な聖書の教えを、いっそう深く根づかせ、確かなものとし(同時に、偽りの教理や教えに対する防壁ともなります)。読めば読むほど、すべてのことが次第に理解できるようになります。あなたがすでに知っている真理の原則は、さらに強められ、照らされ、より深いものとなります。そして、神の御人格についての励ましと洞察を、あらゆるページの中に見いだすようになります。読めば読むほど——本当に心を開いて読むほど——あなたはあらゆる面で、ますます神に近づいていきます。野蜜よりも甘い神の御言葉を、あなたの魂の深みへ、あなたの思いと霊の土台そのものへと深くしみ込ませなさい。そして、神の御言葉が、あなたの目覚めている間のすべての思いと切り離せないものとなるまで、それを受け入れなさい。

2. *正確性についての心配 (Worries about Accuracy)*: あなたが読んでいる英語訳聖書の真実性や信頼性について、過度に心配する必要はありません。今後の「聖書の基本教理 (Essential Doctrines of the Bible)」の概説やシリーズの中で、私たちは聖書本文と正典について、ある程度詳しく扱う機会を持つでしょう(また、下記の「翻訳版」に関する注も参照してください)。しかし今の段階では、あなたの持っている標準的な聖書は、その目的のためには十分であると安心してよいのです。たとえば、もし私たちが夕食について心配し、それを微生物学研究所へ持って行って徹底分析したとしたら、おそらく微量の不純物が含まれていることは分かるでしょう。しかし、それらが重大な脅威となることはありません(そしてもちろん、まったく食べないことのほうが、はるかに重大な危険でしょう!)。これは、広く普及しているほとんどの聖書翻訳版にも当てはまります。もちろん、教師になる前には、もっと詳細な知識(例えば、翻訳の基礎となっている原語についての知識)が必要になるでしょう。しかし、個人的霊性と霊的成長のためには、あなたが持っている聖書は良質で堅実な食物です。それを食べないことだけが、本当に重大な危険なのです。なぜなら、私たちはそれを読むことによって、神が与えてくださった御言葉を通して、神とその御子について学び続け、日ごとに神との関係を築いていくからです。

3. *聖霊の助け (Help from the Holy Spirit)*: 聖書がクリスチャンにとって究極的基準であるように、聖霊もまた、究極的教師です。信者である私たちは、聖書(目に見える導き)を読む時、聖霊(目に見えない導き)によって助けを受けています([第一テサロニケ 4 章 9 節](#); [第一ヨハネ 2 章 27 節](#))。ですから、私たちは聖書を読む時、それを「片

づけるべき作業」としてではなく、むしろ学ぶ機会として熱心に近づくべきです。意味を理解するために時間をかけて読み、立ち止まって考え、黙想し、自分が読んでいることを熟考し、そして聖霊が聖書を通して神について教えてくださることを許すべきです。結局のところ、聖霊の私たちの人生に対する働きは、聖霊が用いることのできる何か——すなわち霊的資本と聖書理解——がある時に、最も効果的になります。それらは、聖霊が私たちを導き、方向づける際の「てこ」となるものです。聖霊は真理と共に働かれます。これは驚くべきことではありません。なぜなら、聖書は「御霊の剣」と語られているからです。それは、この世のあらゆる偽りと悪に対して、私たち信者が立ち向かうための武器なのです([エペソ 6 章 17 節](#))。

4. 人間の教師からの助け: 聖霊の働きの効果が、私たちの御言葉の摂取量に比例して増し加わるように、霊的成長の過程もまた、神のご計画におけるもう一つの不可欠な要素——すなわち、教える賜物を与えられ備えられた人々——によって、加速されることができ、またそうあるべきであり、最終的にはそうならなければなりません。理想的には、この三つの要素は調和して働きます。すなわち、一人ひとりのクリスチャンが、聖霊の働きの影響の下で熱心に聖書を読み、同時に、教理的に正確な聖書教育を、定期的かつ体系的に受けることです。実際、この三つの要素のうち一つでも欠けるなら、霊的成長は損なわれます(少なくとも)。御霊の働きがなければ、神の事柄は愚かで無意味なものに見えます([第一コリント 2 章 14 節](#))。正しい教えがなければ、信者は、自分自身で聖書から汲み取れる、より明白で基本的な原則(すなわち、固い食物ではなく乳:[第一コリント 3 章 2 節](#))に限定されてしまいます。また、自分自身で聖書を読む個人的習慣がなければ、信者は、神の真理による日々の強めと交わりを大きく欠くことになり、同時に、不正確あるいは誤った教えに対して無防備になってしまいます([エペソ 4 章 14 節](#))。

これらの問題については、今後の「聖書の基本教理(Essential Doctrines of the Bible)」シリーズにおいて、さらに詳しく論じる予定です。しかし今のところは、すべての信者が次のことに心を砕くべきである、という原則を確認しておきましょう:

- 聖霊において神との交わりを保つこと(その交わりが妨げられないよう、必要な時にはいつでも自分の罪を神に告白すること:[エペソ 5 章 18 節](#); [第一ヨハネ 1 章 9 節](#))。
- 自分で吟味した情報源から、聖書に基づく教えを定期的に受ける習慣を維持すること([ヤコブ 1 章 19-21 節](#); [へブル 10 章 24-25 節](#))。

- ・ 自分自身で、毎日聖書を読み、探求する実践を保つこと([第二テモテ 3 章 16 節](#); [ヘブル 4 章 12 節](#))。

#### 5. 聖書翻訳版とその信頼性 (*Versions and their Veracity*):

前述したように、一般的な聖書翻訳版の大部分——すなわち、特定集団の主張を証明することを本来の目的として作られたものではない翻訳版——は、日々の聖書読書の伴侶として十分に優れた役割を果たします。おそらく、最も人気があり、広く普及している英語訳聖書は次の四つでしょう:

The King James Version (KJV)

**長所:**

疑いの余地のない学問的水準; 補足語句をイタリック体で示していること; 原語における両義的構文を反映した、創造的な曖昧さ。

**短所:**

現代英語からあまりにも隔たっているため、容易には理解しにくい。

The Revised Standard Version (RSV)

**長所:**

学問的成果による翻訳; 滑らかで均質的、かつ文学的な文体。

**短所:**

翻訳がやや無難すぎて、迫力に欠ける; 原典そのものよりも、自由主義的学説が優先されている場合がある。

The New American Standard Bible (NASB)

**長所:**

現代英語における最良の「逐語的 (literal)」翻訳。

**短所:**

文体があまり滑らかではない; 意味より逐語性を優先しようとする姿勢そのものが、不明瞭で誤解を招きやすい翻訳を生み出している箇所がある。

The New International Version (NIV 1984)

**長所:**

利用可能な翻訳の中で最良の「自然な英語」訳; その洞察に富んだ翻訳方針によって、この版は最も力強い「読み物としての聖書」となっている。

注: これらのコメントは 1984 年版にのみ当てはまるものであり、現在作成されつつあ

る、時に根本的に異なり、多くの点で劣っている 2010 年以降の版には当てはまりません。

#### 短所:

しかしこれは、使用する上で最も危険な翻訳版でもあります。というのも、その大胆な翻訳が、しばしば誤解を招く意味合いを与えるからです。この版を用いる場合には、別の聖書も手元に置き、「意外な」箇所については再確認するのが最善です。

しかし、なぜ一つの翻訳版だけに限定するのでしょうか。同じ翻訳版を何度も読むより、複数の翻訳版を読むほうが有益です。そうすることで、それぞれの翻訳から少しずつ異なる視点や新たな洞察を得ることができます。私自身の考えでは、最初に読む翻訳版としては NASB が最良であり、二番目に読む翻訳版としては NIV が最良であるように思われます。

#### 6. 実地的な方法についての提案 (*Suggestions on Specific Procedures*):

- 毎日、少しでもよいので続けること。最善の意図から「もっとたくさん読もう」と自分に約束するよりも、毎日一章か二章を着実に読み続けるほうが、はるかによいのです。そして、生活上の事情によって計画が妨げられた時に、挫折して勢いを失ってしまうことも避けられます。
- 特定の時間と場所を決める。聖書を読むことを、朝のコーヒーや新聞、あるいは運動のように、あなたの日課の規則的で侵すことのできない一部としなさい。できれば、同じ場所で、決まった時間に行う習慣にしなさい。あなたは毎日歯を磨いているでしょうし、おそらく一日に何度も磨いているでしょう。毎日聖書を読むことは、私たちの日常習慣の大半と少なくとも同じくらい重要であり(しかも私たちにとって、さらに良いものです)。
- 複数の箇所を同時に読む。定期的に聖書を読もうと決心した人々にとって、旧約聖書の長さや複雑さは、よくあるつまずきの原因です。聖書の複数の書を同時に読むことを考えてみなさい(必ず新約からも何かを含めること)。単純な方法としては、一日に二章読むことです——旧約から一章、新約から一章です。そうすれば、旧約を一度読み終える前に、新約を何度も通読することになります。しかし、それでまったく問題ありません。なぜなら、新約聖書はイエス・キリストについて、より凝縮され、より明白な啓示だからです。多くの聖書書店では、しおりを販売しており、それを使えば、場所を見失うことなく、同時に複数の書を読むことが容易になります。

- 意味を理解しながら読む。聖書を読む時間を急いで済ませてはなりません。「読み終える」ためだけに、後ではほとんど内容を思い出せない三章を読むよりも、一節を読んでそこから何かを得るほうが、はるかによいのです。聖書を読むことは、たとえそれがあなたにとって有益なものであったとしても、「仕事」というより「楽しみ」に近い活動であるべきです。自分自身に、読んでいることを理解し、そこから靈感と教えを受ける機会を与えなさい。聖書を読むために座る時には、常により態度を保つよう努めなさい。そして暗記については心配しないことです。読んだ内容を一語一句覚えていることよりも、それを理解していることのほうが、常に重要です(この二つは、決して必ずしも一致しません)。結局のところ、あなたが読んでいるのは原典の翻訳です。そして翻訳は数多く存在し、それぞれ表現が異なっています。ですから、私たちが重視すべきなのは、正確な言い回しではなく、「意味」そのものなのです。暗記は有益である場合もあります。しかし、「読み進めること」と、「いくつかの節を覚えるまで何度も繰り返すこと」のどちらかを選ばなければならないなら、読み続けて前進するほうがよいのです。
- どのように行ふかよりも、実際に読むことのほうが重要。霊的安全と霊的成長のためには、神の御言葉を読むことに代わるものはありません。

関連主題についての有益なリンク:

Christian Vassallo による Bible Reading Log (英語聖書通読の助け)

[ラオデキヤ:現代の生ぬるさの教会時代](#) (「来たる艱難期 第2部」に収録)

[艱難期における聖書の教えの欠乏](#) (来たる艱難期 第3部Aに収録)

熱いか生ぬるか? 聖書の教え vs 説教 (-未翻訳 [Red Hot or Lukewarm? Bible Teaching versus Sermonizing](#))

聖書学: 聖書についての研究 (-未翻訳 [Bibliology: The Study of the Bible](#))